東京妓情

醉多道士戲著

中

風
2
二

ヲ 6
435
2

東京大学図書館

門 津6
號 635
巻 2

明治三十六年十一月五日
坪内雄蔵氏寄贈

東京妓情巻之中

花柳御門　醉多道士戯著

○芳原

○歴史

芳原藝者の創まる何時乃頃あるを詳かにせざれども河東節乃書に藝者幇間の文字なく新内節に始めて有るを見るも百年以後のそのと思もる維新以前も男女の別おそのれ幇間と趣きを仝ふ〳〵唯遊客に興を

○先欲說滑行

迎ふるに止まり猥褻け聞えも更にけらざりき、殊さ本地も巫山情梦を以く本色さを
るが故に藝妓をあれどもなきぐ如くその
実娼流の婢女さ一般ありしぶ遷都以來恩
波彼ぶ身丹及び千歳舉らざる頭を擡げ藝
妓乃芳原にけるあをを知らぬに至りて
是さ於てあ堀山谷の藝者ハ頭うに冷を來
し爲め丹本地に移住し自來稍娼流と並び
立つの地位さ昇りて然れども花柳城の習

○頻挫

ひ娼妓に對して寸歩を讓らざるを得ざる
を以く之さ遇るを依然とし下手に組
み花魁々々さの聲も其口さ絶えず蓋し娼
流けりく而しく已れあるの理さ由るあ
ん

○風俗

芳原藝者に二種けり一を懸板と称さ舊ハ
仲町の會所に名板を懸けく仲の町藝者を
表したるより然云ふなり此妓も仲の町乃

茶肆及び大中二楼さあらざるも聘丹應ぜざるものに一をモグリと呼ぶ娼院の大小を論ぜず茶肆の優劣を問もば處嫌もば

○與轉行孰與優劣

モグリ。歩くの謂丹〜〜仲の町乃會所さ名板を懸けず且つ懸板藝者と交際せず故さ常さ彼れさ靡せらも一歩を讓る然もども技藝さ至りて彼れさ超る万々実丹藝を賣る妓と云ふべし當時芳原の妓も錦帶を解て娼權を犯すことと嚴禁し若し之と犯

○潛歩妓之鼻將丈餘

せむ裸程ふして仲の町を大歩せしめ以て罰しなるが明治四年解放後も終さその制破れ江戸藝者（芳原藝者他の妓を呼んで江戸藝者と云ふ）と同じく應來を專務とし甚ざしきハ娼流の客に〜〜金ゐる者と見れむ御膳を据えて之を奪ひ騙〜〜財を攫もるより娼流と平地さ浪を起もむと侭之あり慾と色とに敏捷る実さ芳原藝者を以て最一と称もべき欤是故丹娼流と等〜〜浮薄ふして淫行あり

○花園曰捺斗大印保證之

○魔王曰新橋妓稍免引合

歌妓犯娼
權遭裸裎
犬歩罰圖

其粧ひ至りてハ麗にして粉厚く媚を賣り嬌を貢するに至りて〻亦東京妓中の稀れ〻見る所なり然もなほ旨く倍父を騙し巧みに未熟の蕩子を欺き情夫〻貢ぐの財を得るに妙なる是亦江戸藝者の上〻なるをいふべし然もなほ本地藝者の客に侍し〻勤むることも遠く江戸藝者乃及ぶ所〻にあらず余聘する毎〻之を賛め〻已まず此一事絶かず全面の醜を掩ふといふべし輓近

○中洲曰褒貶自在妓亦不能立腹

雛妓の勢ひ頗る盛ふして蒼妓ハ爲めにその下風に立つに至り是れ客の雛妓を愛し雛妓も亦能く之に媚び嬌し〻く春を鬻げむなを人外天地〻生を遂ぐる者〻ハいへ實に忍びざるハ芳原藝者ふして不実無情侠の何物〻なるを知らず唯〻慾之れ事〻して試〻に問ふ冶客之と讀で尚その臭乃下を長くするや否

三千紅粉競豪華遊冶此郷春不差別有絃

○醉翁曰所謂後世可怕者

○世人之臭叢已延過矣再無可延謂

歌、嬌姉妹。海棠又欲靡櫻花。

○講武所在萬世橋外

○神田旅籠町ハ住む歌妓を称して講武所藝者と云ふ

○歴史

○花柳曰一個東京地誌

講武所ハ舊加賀原と称し廣袤数百歩、春日躑躅青の地ハしく傀儡師軒を列らね草屋を結び衆觀に供し殺風景の域なりしが今を去る二十二三年前幕府ハ尚て水道橋内

○先呼來傀儡師欲視本地妓也

へ設立せし講武所を廣むるに方て、その接近の町家を没しまの地に換へ、與ふるに加賀原を以てせしより俚俗呼で講武所と称せり、その後此原に人形芝居結城座を再興しく觀ゆそなへたるより世間奇を好むの慣ひしく頗る人意に投じ紅塵絶えざりしかど劇街の例忽ち一二乃藝妓を現ぜし觀客が酒席に需めに應じたりしを講武所藝者の權輿とし而しく同芝居年を閲せば

○慨慨

○醉翁曰世間愛活

人形夫如此甚矣

〇醒史曰訕諭刺衝當局者

しく倒れたりと雖ども藝者も敢て業を失まじ終さ居附となり殊さ妓籍に入る者日日に増加し今さ講武所藝妓の一幟を立て萬世橋外ふ獨立しく千歳の平康さえなれり嗚呼幕府治に居て乱を忘れざる講武所の名今空しく紅裙の肩書に残りその主さ漠然として亡びぬ、是れ他なし、歴制乃政度に因るのみ

〇風俗

〇魔王曰徐々御鉢廻執事書生來

本地の妓さ何の目的よりしく成立しこの更らに考ふるに處なし唯目下主さる所れ明神山上の開花楼及び雪月楼、その橋内外一二の酒楼に過ぎざれしく之こ飲むその判任相公華族の執事書生或さ商估職人等しく大髯公文士の跡さ甚だ稀なり故さ其技や長ずるを須ひざ、その喉や朗かるに及むで是を以て本地小姿色なるものなく技量なるその乏しく只流れ渡りに御恭を

濁れる者と言はんか、それぞみや情を以て藉名ある妓も顕れぞ、俠を以て知られたる姉さんも出でぞ、又醜名を流傳せる意氣筋のともがらぞ蓋し本地一般の妓乃性質頑悟なるず特り姑息之安んぜるに原因せる者からん然きども氣淡くして意措く處かきも所謂神田兒の性質を備へて取るべき者なり但しその粉飾ふ至りても余も之を神田藝者とする能はば、問ふく阿卿も山の

○語曰過猶不及本地之諸姐善保守

○此是忠告

手かと言ふぞんばわらば此の如き所以のものも其容多く田舎漢の野夫を敵手として数ぐあるを以くなり神田乃姉さん夫れも氣が附かれやせん乎

香野香残野竟空。踏青人入綺羅叢。少年從是流文弱。講武名留歌舞中。

○天神在本郷區湯島

遥ろ小忍ケ岡公園の蒼翠を挹み近く小西湖の溶漾を臨み洛陽三月花弄もべく河湖

○説地之義則是惡

慈之前置

の避暑興取べし中秋蟾娥仰で招ぐべく晩冬の銀界飲んで賞すべきハ湯嶋天神臺を措て夫れ何れの地ふか求めん此地舊東叡山直轄の處ふして妓流の棲所なるを許さず往時彼の變童あるもの聚落ふして僧侶乃菩提心ふ傷けたりしが安政年間より變童日ふその跡を藏くし之ふ代るに妓を以てせを想ふに當時茲ふ飲む者多くハ妓を數寄屋町より呼ひ揚げしこの故ゝ意を妓ふ

○本地亦因此其尻軽

○前狼後尻多事哉地色界

置くに注ぎしその數自來妓籍增加し目今も三十名内外ふ在りて酒樓も天神境内ふ四五軒の多きを致せを。ても偖も色の世乃中ある哉

○風俗

上地も數寄屋町の上にありを雖ども地位も下ることゝ數等齊しく清秀敷舒一泓澄碧を臨むを雖ども氣韻に乏しきまゝ亦數等是れ他あし本地の目的たる客も大学醫学

○燈王曰讀至此知酔翁無愛憎

部の書生及び砲兵本廠の職人あり其氣を高尚にしその風を瀟洒にするも客の感ぜざるを奈何せん是を以て意氣下りて客と並立し遂に一般の風俗となりしあらん故にその擧止陋にして見識てふものも曾て無く又伎を以て賣るものも本地三十の妓中僅かに一二の老妓と止まるのみ他も嬌て情を挑み或ひは豪飲して氣を鬪し或ひは心ひらめ落ちなん風情を見し一種別

○中洲曰氣下文字帶臭味

○事情至是至美尽

様の趣あり故に渠を左右し之に遨遊して歡娛をつくせども頗る妙境なりと雖も東京妓を以て之に遇するも余が心に甘んぜざる所なりされども匍出しの田舍漢も決して野夫を以て排擊せらるべ可なりと歡を與へて帰らしむ是れ業に怜悧なる欲將と客を見て逃がさぬ趣向の或ひは常に冷かるを捫る欲恐くも此外に出でざるんば然れども本地の妓たる斯の如き陋なるあも拘も

○魔王曰所以醉翁遊本地

らに情を以て顕はしたる阿國万吉（旧名あ小若）を俠を以て出でたる玉吉等なり是れ何ぞ原因なるか然るこの想ふに高臺に獨立して見聞他丹及むを所謂お坊さん成長に據るか或ひは流弾に渉の惡摺れあるに因りて欲此性癖かく此教坊の名を潔ふするに足る本地に遊ぶ通人試みに渠等に向ひて騙術を行へも渠之を信じて疑はざるを恰も處女の如し

○中洲曰過賞々々

○信而行之勿食贅鉄砲

天神祠畔一望清。不忍池蓮上野櫻。爲此風光無限好。野梅郊柳亦多情。

○神明（在芝區）

○神明町○三嶋町に住する歌妓を総称して神明藝者と云ふ

○歴史

神明の藝妓は楊弓店婦より變成したる者なり當時徳川さんの盛かる頃愛宕下は多く各藩邸の地にして之れ勤番する武士、無

○先説不風韻之由來

聊を慰むる為め神明境内に赴き水茶屋婦及び揚弓店婦に戯むれ時々携へて酒樓に登り歡を呼び興を引きしより何時とな旗亭の間に妓屋顕れ以來歳月の久しき

○夫、又引合

一小聚落をかせり一新後関西の子弟東京城南に占居し爭ふて茲に飲みしより神明の風月頻かに光色を増し遂に純乎たる綺羅叢さいなりき

○風俗

○花柳曰見揚弓店婦之地金

本地の妓は武佐より成立ちたる所以にて
る故、竹芝の操乃色に似ず、西京流に脂濃く
粲麗の風を重んず云へば淡泊せざる表飾
なり、その心事も至りても情と意氣地も絶
えて之を意に措かず只倉夫の嚢を狙ひ之
を攫むを汲々たり、之に加ふるに芝魚肆の
健兒と相往來するを以て輕躁にして氣ら
らく彼の所謂汚轉婆の風にるも東京綺羅
の数部中に於て未だ見ざる所かり、想ふに

○中洲曰　賛成々々

今一歩を進めて之を韻致を解せしめむ侠を以て任ずる者或る紅板の間に見んも未だ知るべからざ斯の如くかまだ技の如きハ猫の皮を叩てそれかりけりの御粗末様と申すべし自餘ハ豈寫し出して反省を望むも遑らんや一切パア

濃粉煩脂售媚頻。神明祠畔薄情春。當年隘巷楊弓女。今日高樓歌舞人。

○深川　在江左

○夢想華　肯者

○仲町に住する歌妓を称して深川藝者と唱ふ

○歴史

古語に曰ふ騏麟も老ひぬれば駑馬ハ劣るとゝ、何ぞ艶史ハ籍名ある深川の衰えく今日の衆揄に至る四等に位するの歌舞場と変ぜしや余洛陽の半死白頭翁ハ聞く往昔百年の前深川ハ岡場所を許さるや娼院妓館櫛比鱗續揚州の秦淮も物かも唐朝の教坊

も斯くほどだふ〻有るまじく殊ゆ芳原と趣きを異ふ〻洒落の遊びを取ら〻を以〻粋人通客衣袂蹇然群を振つ〻相先ち繁華實ゆ宇内〻冠絶し通言羽織と称する歌妓の如きも情濃かに意氣地深く誠ゆ江戸ッ子を以て客ゆ接し人皆古今未曾有乃平康と称せしゆ一たび他場所廃止の令出しより土橋の雨〻行吟俠の聲も跡絶へ送り迎ひの船枕紅院青樓も呂生の夢ゆ入り空し

く菜花舞蝶の荒甫となり〻自來本地ゆ留るものも各藩留守居會同の燕〻侍し或も通人ゆかき跡を弔ひ〻平清ゆ飲む等の招きゆ應じ或も仮宅の設立ゆ臨みて終かよ炊煙を揚げたりしゆ一新以後仮宅も稀れ〻〻となり加ふるに能く宴もる輩も柳橋若くハ新橋ゆて十分に〻〻歩を深川ゆ進むるものかきまり遂〻今日の寂寥を來し深川に妓ゆりと云ふも怪しむ程ゆ至わり風

○慨歎

月の澆季といもん欤将さ開けて手早くか
りしが余白頭翁の語るを聞き情事ふ於て
歎息おき能もに噫
繁華百載夢茫然。纔有絃歌，認舊縁。仇姐米
娘何，處弔。満川，風雨伴漁煙。

○風俗

○借來絶妙

當時羽織を称し風流を江左ふ競ひ情を八
幡の鐘に詫ちなる彼の仇吉米八諸姐を六
道乃十字街の珠数屋町もへイ今晩も現

○請聽

もし今の姿を見せしめを将さ之を何とか
云もんエいぢれッていを言ひ續け癪を押
へる無理酒もその咽へも納まるもし侫し
有擊それ者の流きを受け微かがらも江
左ふ獨立し深川の肩書を負ひ殊ふハ有髯
の田舎漢に侍せば唯その地の材木商又も
温古の通客ふ接もるが故ふ因循にこそふ
き品高く可憐の風あり又よく客に接もる
の道を知わり只惜むらくハ熟閙の地ふ出

○深川妓甘服馬

で〳〵他の藝者にもまれぞ之を以て時機ふ後れ風俗に背き総て事かけたるやうに覚ゆ杜牧の詩ふ曰く江東子弟多才俊。卷土重來未可知と他年東京湾あるの時地勢の変遷よりして舊蘇小を新柳の間に見る乃嬌窩となるも未だ知るべからず

○眼斗大

○神樂坂在牛込門外

○神樂町○肴町の歌妓を神樂坂藝者と云ふ

○歴史

大鼓を叩き鈴を振り祝詞を朗とする神樂坂豈ふ殺風景の歌妓あらんや而して之ふ是れ舊より有る處にして一新以後旗下の邸を開いて市街となせしより閑西の健児が股間に猿田彦の面を挿み行吟歩きを以て之を網せんとして天の宇須女の如き婦を餌とし開設したる揚弓店の変成ふ係もるゝのこと神明と一轍ふ出るを以て別

○仮設勺法妙

朝妝ニ
有効
家

に八ツの御耳を振り立て聞かしむべき事あしと畏みゝのみ白も

○風俗

洛陽や廣し関東道ふしく三十里その洛陽城前を下町と唱へその後を山の手といふ而しく意氣風俗稍異あり妓に於けるも亦然り本地の藝者も陸軍武人或も鯰公の執事書生等乃田舎漢多きに居る故ふ意氣地立引きの習ひなく唯その首を白くしその

○仙史曰醉翁以官員為不粋一口罵去我未知其是非思非法主憎則及製裘之謂否乎

尻を輕くし客をして沈湎泥の如くならしむるの術あれど妓の役を濟むを以て技藝の如きもペコ〇〇〇コレヤカと猾惚甚句を奏れど客意に投じ囃助の祝儀頂戴に至る故か勝ちを技に取らんとするをも曾て見聞せざるなり然るども若し神樂坂に藝者かくんど余も断然山の手に歌妓あしと云もんのみ盖し折りに姿色の取るべきその出づれどなも

神樂坂、遏妓弄、咽。牛籠門外客流、涎。休、道山園物華薄。野鶯亦自領、春妍。

○本石町

歴史

本地の妓の目的とするものは何なるを詳らかにせざれども雖も小部落を為して永續する所を見るまで又目的なしにはらざるべし想ふ遥ろに日本橋北駿河町の妓と連絡を通じ本町及び石町遏ゑ飲む客を目的

○魔王曰讀歴史知其風俗

とする者あらん殊さ同所を大賈旅廛軒を列ぶる中に差錯するを以てその主公或を主慣又を旅人に携へらるを以て四面に向ふの要路あれば之を以て安居するなる所

風俗

温和を主とあれば大賈の間ふ交るを日本橋と神田の境にあるを以て流石ふ風致卑からぎ然うも意氣爽かあり去り乍ら自然と良家阿娘の風を帯び萬事活達ならば通

○醒史曰本地之妓多幸係醉翁之筆頭不被酷遇蓋由有旧藤八之故

乎呵々

人粋客をしく再顧乃念を生ぜしむるその
を稀あり到底白門の間ふ立く姉姐と呼び
る者ハ本地より出ることあきと信じ
家傍商賈翠簾軽球燈標名尤有情。只慣平
生良家俗。吹弾亦帯處嬢聲。

○新富町 在築地

○新富町○木挽町ふ住する歌妓を称し
て新富町藝者と云ふ

○歴史

新富町も新富部劇場の在る地にしく舊諸
藩の邸址なり妓乃有りしあを知らきしハ
劇場新設以來さしのへどもその実幕府時代
より已ふ木挽町舩宿の間に散處し武左の
聘ける所たり尋て島原の遊廓開院以來稍
人負を増し勢ひ将ふ一個の香苑たらんと
せしが同廓廃絶後寝衰しく跡を収めんと
するの状ありしも劇場成るよ及びて死灰
再び燃へ自後姉。もん。今日む。の聲ハ酒楼の

○應來亦有定尺乎

間に絶へざるに至れり

○風俗

西の方新橋を隔つ一帯水のみ而して其の位置の五等ふ在る者も何ぞや俚諺ふ所謂帯ふハ短かし綿襁ふも長きそのにして然る欵本地も劇を以て成り歌妓を以て立たを妓も纔らに落ちぶれの客を目的よりるのみその風俗も梨園弟子と相往来し猥褻乃中に日を送くると以て自から軽騒浮

○魔王曰讀而推其心事不衡愛想者其人必汚贈珍

薄に流れ意氣地及び風流情の如きハ之を阿岩稲荷に願ひて斷ち毛厘ばかるなし俳優ふ繼續して折ふ醜名を新聞紙ふ傳ふるものあるも固より彼我ともに浮氣家業なれを敢て之を情事とも認め難く櫓下ふも通例ふて意氣筋とするに足らざるなり

○猿若町　在浅草

本地に妓ハ三劇場中村座市村座守田座　遷移以

○醉翁曰猫従徘徊若犬則喧嘩

来さを一新以後三座ともに田舎氏の烏丸その大厦を奪もれ而しく各所へ轉座の後も妓も與も散乱せしこの近年市村座再興以来復さ移り来り微々さしく猫の皮を撲ちのめせり風俗も新富町も大分小異おれど次へ銚子のお代り

従曽三劇、轉場去無更多情、訪越娘況又項来祝融怒東風刼後懶新粧

○向島在澪水之滸

○須崎村に住むものを向嶋藝者と云ふ

○歴史

十里香雲三月の花萬頃の銀界冬日の雪、画舫朝に維ぎ玉鞍夕に去り以て情懐を遣る

も東京廣しと雖も澪水に若くもなし是を以て歌士女の花さ飲み騒客の月に醉ふもの群り来り絶美を称そ、旗亭之さ由く開き茶肆是に因く門帛を垂る花匂り月あり酒匂ひ肴あり飲むその妓を欲せざる能はず

○仙史曰同意々々

○不時字放眼視馬

然るに此地尤も輪蹄の劇しきを春日にあり故に妓を此倨を十一山谷及び廣小路より出張して不時の求めに應ぜしが一新以降情天色地の劇し一層の劇を加へ風流汗流まで尽きざるより遂に遷陌の下須崎村の巣穴を結び風來の沈酒氏を待つ〻

○風俗

夫れ寥廓悠長の處に解語の花之を市井紛

○中洲日令夢香洲妓魁死

○花柳曰猶等座被袋退

冗中の者に比ぶべ幾何の閑雅温淑出塵乃趣きあるべきの理あり然るに本地の妓を姿色態度不言に花も若かざるのみならず平々凡々氣節なく韻致なく唯八百松及び植半主人の鼻息を窺ひ常に戰々競々としてその怒りに觸れんことを是れ恐る阿諛嘸此に仕ふること恰も家婢の如くに是れ他なし本地の旗亭にして妓の多く入込むは二家を重とするなり若し此二家の

怒りに激せむ恨むべしその口乾上り喉を鳴らすこと能はずして然るなり抑も他の綺羅褒落さ入りさく立幟し技を賣るその此乃如きみゝめか下よ安んゝて平つく。張らんや蓋しその姿色並びふ技能皆他さ向ひて賣れざるが故さ甘ゝく茲にお茶を濁すのみ餘も推しく知るべきなり

○係華路坂赤みゝめ

○赤坂

○田町か住る歌妓を称しく赤坂藝者といふ

○歴史

赤坂も古くより嬌苑ありし地ありくその始めを知らば當時旗下の士及び雲州侯松平氏の藩武左を目的さし煙を揚げ微々としく城西に割據せしが一新以後本地の四面紫衣の人々居址さなり都珍らしく遊び初めしより土着の妓のみあくハ敵をうくるに足らば自後朝集暮散の烏合兵集り來

○一新思澤

○醒史曰語險文妙

○賢張向之

○醉翁曰此等鈍刀不足傷余

り一綺羅城を築き之に據て肉壘を高くし溝を深くし薙刀を磨して陳を張るの紅裲隊とハなるべし

○風俗

試みに治郎丸向ひ〳〵獨夫が不時の求めを待つ妓も何處かりやと問ふ必らず本地と咎へん赤坂の應來を以て本來の面目とするそれ此の如し是れ他なし同地に遊ぶ人も大抵鼇官以下ふして品位ある人ハ正治

○鼇官心事堪憫

○游客有等級妓無豈莫等級

翁の外未だ聞かざる而し〳〵鼇官の云ふ所ハ曰く我長官我相公常に新橋に非時の花を折り巫山に夢遊ふ我も人なり彼も人なり我〳〵往てその快味を試みんと然るに悲哉薄俸小祿一夕新橋に遊べば一月の給金夢と爲て散ぬ是に於て乎歩を赤坂に向けその速且つ廉なるを思ひを遣る是赤坂の應來に繁昌し〳〵駄客の多き所以なり然ら妓に〳〵娼〳〵ふし〳〵妓その俠〳〵風致と

の如き何ぞ御尋ね申さに遑けくんや況し
て技能をや
偏地何言絶粉塵城西咫尺又烏春。野花必
竟任他折便是墻桃路柳人。
○廣小路　在淺草
○歴史
本地の妓も此邊の酒樓を目的とし〳〵成立
しまたかわも古來より敢て冷熱あく偏へ
に觀音薩陀の利生に依頼し世の移り変り
○醉翁曰有千手觀音之技量者甚稀

に動かされぞ然もとども土地に見込むべき
客なけもび百度参りも逆せ蕩子も稀なる
處かり
○風俗
粉飾も淺草のいさく情を隅田川の淵より
深しと評し去れぞ定めく姉妹達乃氣に入
る處けもとも朝集暮散の客をゆて三筋の
絲に世を渡るなもぞ無味無香ふし〳〵遊客
と〳〵再顧の念を懐かしめば然れども さ
○御門曰温柔鄉里香味有無余不保證之

そゝの熱閙の地に往来しく万客に接する故か技量ハ遥かに山の手藝者の上に出で且芳原てふ章臺に近きを以て風月の情を畧々解するものに似たり然し取り込みふ急なる性質有を以て往々人をして厭もむ唯通り一遍の妓とし〳〵之に遇さで左程御損もせざるべし

○妓亦以通一遍待之

綺羅紅粉亦爲叢淺草寺邊西又東。日夜賽祈人不絶。妓家熱頼佛恩洪。

○蒟蒻嶋在霊岸島

○冨島町に住む歌妓を称しく蒟蒻島藝者と云ふ蒟蒻島ハその俚諺なり

○醒史曰莨菪島得醉翁始頭此如罵詈辛棒可

○歴史

東京に嬌窩夥し冶客も亦頗る多しとあれ然きども君蒟蒻島に遊びしやと問ぐ十人皆未だしと答へん啻に然るのみならず本地に歌妓あるを訝かる程なり而して本地小妓ある近年のあとにならぶ幕府時代已

にとれいりその已に久しく有て名の噪ぐざる所以の者も何ぞや　妓奴ヘイ御迎ひ妓アノ直つさヨ

○風俗

本地も何の目的あり〻永續し粗末ごろも妓街の体面をかゝ欠曰く小網町及び八町堀靈岸嶋の船問屋又た積問屋その他貨物乃諸問屋へ仕入れに來る地方の商人を馳走する爲め本地の妓を聘しく興を助け

○中洲曰醉翁探索至是服其子細

しむるあと四季ともに間断あし是れ本地の永續しく一方に獨立する所以あり夫れ地方の人も朝に來りて夕に去るそのあり何ぞ姿色を顧みるに遑のらん又焉ぞ情事に奔走するに遑のらんや故ふ本地の歌妓も滑稽洒落所謂芝居の半道に似たるそのにしく多く姿色に乏しく技量も亦人を感ぜしむるに足らぞその情事乃如きも嘗て之を知らざる者の如し然れども席ふ在く

○半道言半道化

4年4月

興を助くるふ至りてもその怜悧なるおとみて他所より甚ざしと妓にても一本食ふ氣の頃る取るべきものなり但しその人よ嬌媚

○醉翁曰
軽茂莨菜

一部搦彈称善訣却恨蕭到估舟囲

興を助くるふ至りてもその怜悧なるおと
頗る取るべきものゝ但しその人よ嬌媚
も蒟蒻島の名に因みて他所より甚ざしと
も世の好事家斯る妓にても一本食ふ氣の
るや否や

○醉翁曰軽茂莨菪島勿附味噌

嬌家叢在霊涯隈一部搗彈称善訣却恨蕭
郎不長逗商船絶到估舟回

東京妓情巻之中畢